

平成21年 6月 1日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520191

研究課題名（和文）森と人間の文化史 伝承文学研究とエコロジー教育の接点

研究課題名（英文）How Humans Have Related with the Forest: A cultural history in search of the point of contact between folk literature and ecological education.

研究代表者

大野 寿子（ONO HISAKO）

東洋大学・文学部・准教授

研究者番号：20397491

研究成果の概要：

『メルヒェン集』、『伝説集』の森の特性を検証しつつ、グリム兄弟の「理念としての森」の意義を、「生の連続性」という観点から明らかにした。言語、歴史、文学、文化における「古^{いにしえ}のもの」の喪失を森林破壊プロセスにたとえ、「古^{いにしえ}のもの」の再評価の重要性を説く彼らの自然観および詩観は、19世紀エコロジー運動の理念における先駆的地位を担う。伝承文芸に必要な想像力の豊かさと、心情としての内面的「自然」を豊かにする「癒し」の力を有する意味で、現代社会における「心のエコロジー」にも繋がらう。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
18年度	1,100,000	0	1,100,000
19年度	1,300,000	390,000	1,690,000
20年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	690,000	4,090,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：グリム、メルヒェン（メルヘン）、伝承、森、自然、ドイツ、魔女、エコロジー

1. 研究開始当初の背景

(1)グリム兄弟編集『子どもと家庭のためのメルヒェン集』（Kinder- und Hausmärchen, 1812-15、以下『メルヒェン集』、「グリム・メルヒェン」と略記、）で頻りに登場する、日常性（生活の延長線上に位置する）と非日常性（超自然的な存在との出会いなど）の両性質を併せ持つ森は、彼岸と此岸、非現実と現

実とを結びつける「異界」の入口にしてその一部と見なされる。そして、その森の背後に超自然的な世界を見いだす見解が、伝承文学研究者マックス・リュートィおよび宗教学者ミリチュア・エリアーデ等により呈されていた。さらに、グリム・メルヒェンがドイツ・ロマン派と密接な関わりをもつことから、「森の静寂」（ティーク）といったロマン派

特有のトポスの一部に取り込まれ解釈されることも多々あった。加えて、20世紀末の酸性雨による「森の死」という環境問題がクローズアップされる中で、「ドイツの森」、「ドイツ人の森への愛」が(再)認識され、その理念の向かう先に、グリム・メルヒェンを含むロマン派文芸が位置していたことから、グリム・メルヒェンがドイツの森の代名詞ほどの勢いで認識され始めていた。

(2)しかしながら、環境問題は(日本においても)エコロジー運動として自然再生への取り組みとして実践される傾向にはあったものの〔2005年愛知万博開催等もこの一例〕人間と自然、人間と森との物理的な関わりのみが強調され、森の背後に超自然的な存在を見いだすという、非合理的ではあるものの伝統的ともいえる、人間と自然、人間と森との精神的な関わりを再認識させるエコロジー教育的な取り組みはまだまれであった。また、伝承文芸研究における「異界」としての森は、その研究分野ではゆるぎないトポスとして盛んに研究されはしたものの、ドイツにおける伝承文芸研究がグリム・メルヒェン研究に援用され、『メルヒェン集』の収集刊行者グリム兄弟のロマン派とも一部一線を隔した編集方針と、彼ら独自の伝承文芸観(あるいは^{ポエジー}詩観)に焦点をあてた、いわゆるグリム文献学研究はまだ少数派であった(いまだ日本においては、「グリム研究=メルヒェン研究」という先入観にとらわれすぎている)。

(3)筆者自身、JSPS 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業の領域「過去から現在にわたる社会システムに学び、将来に向けた社会の持続的発展の確保について研究する領域」の中の、小長谷有紀教授(国立民族学博物館)研究グループ「伝承の現場からの考察」における「世界の口承文芸の変容」研究班の共同研究者として、愛知教育大学(当時

の勤務校)における共同研究者による実験授業を主催し、伝承文芸研究を幼児教育に活かすという試みを研究していた。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、グリム・メルヒェンにおける「森」が、グリム兄弟の「根源的なもの」の総体として、理念的かつ普遍的に捉えられることを、兄弟の学術著書全体を精査する総合研究「グリム文献学」の見地より実証することにある。グリム兄弟の「森」あるいは自然への思念は、自然を支配する当時のキリスト教文化圏にありながら、環境としての「自然」のみならず、己自身あるいは民族の根源としての「自然」の価値を説くものであり、それは、「自然(森)との共生」のあり方を理念的側面から支える意味で、現代社会にも通ずるものがある。

グリム兄弟の「森」あるいは自然への思念は、環境としての「自然」のみならず、己自身あるいは民族の根源としての「自然」の価値を説くものである。第二の目的は、「自然との共生」教育に、畏敬の対象あるいは異界としての森という精神文化史的観点を導入し、伝承文学(グリム研究を含む)を用いた「心のエコロジー」教育の提案と実践を試みることにある。

3. 研究の方法

(1)グリム・メルヒェンにおける「森」を、グリム兄弟の理念における「根源」の総体として普遍的に捉え、その事実を、兄弟の学術著書にまで視野を広げた総合的な研究により実証する。

(2)グリム・メルヒェンのドイツ中世文学およびゲルマン神話受容、及び20世紀初頭の民族至上主義におけるグリム・メルヒェン受容といった、グリム以前と以後の影響関係のあり方を、文献学的かつ社会学的アプローチか

ら明らかにする。

(3)ドイツ伝承文学とグリム・メルヒェンとの影響関係を検証し、神話、慣習に表れる「森」およびドイツ文学史上に表れるトポスとしての「森」の変遷をたどる。

(4)自然科学のように森に直接アプローチするのではなく、「表現された森」を手がかりに、人間が森に何を感じるのか、そして「森」の中に人間はいかなる記憶を探ろうとしているのかを、ドイツに限定せず欧米やアジアにも視野を広げ考察する。

(5)森の物理的側面のみに着目した現行のエコロジー教育をより豊かにするために、伝承文芸研究を活かした、精神文化的側面からの森の学問を提案するとともに、グリム兄弟の古代観や自然観を現代のエコロジー論に活かす可能性にせまる。

4. 研究成果

〔平成18年度(2006)〕グリム兄弟の『メルヒェン集』における森と人間との関わりについて、その日常的な側面(木材、食糧などを供給する点)に古い時代の自然との共生が見いされる点、さらにその関係性が登場人物が森へ行くさまざまな動機に多く表れる点を分類分析した。『メルヒェン集』の森は超自然的な生き物の住処でもあり、森とそこに住まう存在とを切り離して考えることはできないゆえに、森に住まうとりわけ「魔女」という表象に着目し、ドイツのハルツ山地を研修先を選び、現代における「魔女伝説」との関わり方を見聞した(8月)。ドイツ再統一以降、ハルツの森(山)は、魔女伝説ゆえの観光地化が進んでいる。しかしながら、それは同時に、魔女伝説を育んだ森を守るという意識にも繋がっていることは、伝承が自然との共生に精神的に貢献している意義深い側面といえる。

また、グリム兄弟が収集刊行したもう一つの伝承文芸集『ドイツ伝説集』(Deutsche Sagen, 1816-18、以下『伝説集』と略記)における森には、キリスト教布教以前の自然信仰における聖域としての意義と、キリスト教改宗により聖林が聖林でなくなるプロセスが、その森に住まうとされた北欧ゲルマン神話の神性やその流れを汲む表象が、キリスト教の聖人に変容する過程、あるいは、自然信仰の聖域である森にキリスト教の教会が建てられ聖性が二重化する過程によって、象徴的に記されていることを検出した。

〔平成19年度(2007)〕研究書『黒い森のグリム ドイツ的なフォークロア』(単著)を郁文堂から出版した。グリム兄弟が収集刊行した『メルヒェン集』、『ドイツ伝説集』のみならず、彼らの文学、民俗学、言語学、法学などの学際的研究業績に目を配り、グリム兄弟の「理念としての森」の意義を「生の連続性」という観点から明らかにした。彼らの文献学研究の根本理念である「いにしえ」の発掘、その「いにしえ」の意味するものが、「ドイツ的なもの」、「いにしえのもの」、「土着のもの」、「自然的なもの」、「詩的なもの」そして「ニーベルンゲンのもの」という六つの普遍概念の総体であり、それらが「森」という表象に結晶化しているのである。このような、「グリム兄弟の業績全体を概観して再びメルヒェンの素材へと回帰する」方法論は、本研究の一部を先駆けて公開した、2005年7月の「国際民間伝承文芸学会第14回タルトゥ会議」(於タルトゥ大学・エストニア)においても高い評価を得ていたものである。

また、講義「魔女 像の比較文化研究」(東洋大学)において、西洋キリスト教文化における「魔女」像の変容の軌跡を辿りながら、一方で受講生には、「魔女」の存在の是非について、この表象の拠り所としての自然(森)

の「異界性」について考察させた。これらの資料分析の結果、現代における「魔女」像が一種の「癒し」の役割をも果たしているという点において、「魔女 - 森 - 自然 との共生」という形で、伝承文学研究を用いたエコロジー教育の可能性が見いだされた。すなわち、伝承文芸研究におけるファンタジー感覚あるいは想像力の豊かさは、自己治癒能力にも通ずるものであり、それが、心情、いわゆる心の中の自然を豊かにしうる、内面の森、理念としての森を豊かにしうるという意味において、「心のエコロジー」に繋がらう。

〔平成 20 年度 (2008)〕前年度同様、森に住まう「魔女」と「自然観」との関連(「魔女 - 森 - 自然」)から、伝承文学がエコロジー意識に寄与しうる可能性を検証し、その成果の公表に努めた。国際的な成果公開としては、2008 年 8 月 27 日、アジア地区国際ゲルマニスト会議 2008 金沢大会 (Asiatische Germanistische Tagung 2008 Kanazawa) での口頭発表、“Das Majo(魔女)- bzw. Hexenbild im gegenwärtigen Japan. Ein Praxisbericht über die Vorlesungen an zwei Universitäten”である。現代日本人が描く「魔女」像が、いかなる影響のもとに形成されているのか、現在では精神的な「癒し」の存在とも見なされる「魔女」と、その周辺を取り巻く薬草や占いなどの「自然」との関わり、「魔女」の存在に欠かせないファンタジー(創造力)の重要性を説いた。また、「有機体とその環境の間の諸関係の科学」という 19 世紀「エコロジー」の初期定義(ヘッケル)を機軸に、外界としての自然保護のみならず、心象風景としての自然とそこに住まう「癒し」の象徴としての「魔女」の現代におけるエコロジカルな意義の可能性を提案した。さらに、ヘルダーの思想を受容したとされるグリム兄弟の「自然」と「人為」との対比をテーマに、「グリム兄弟と森

のエコロジー」という論文を作成し、現在校正中である(岩波書店『思想』)。そこでは、グリム兄弟の論文書簡などに表れる、森林破壊に喩えられた、言語、歴史、文学文化各方面における「古のもの」の喪失プロセスと、それらの現代における再評価の重要性を説く彼らの自然観および詩観^{ゴエジー}は、ロマン派思潮とも結果的には共鳴し、19 世紀ドイツエコロジー運動の先駆的ポジションを担うことを説き、彼らの収集『子どもと家庭のメルヒェン集』の森に託された、「自然」との有機的連関と精神的な関わりに関するメッセージを明示する。また、『メルヒェン集』における森にエコロジカルな側面を見いだすのみならず、グリム兄弟の思想に対峙する、いわゆるグリム文献学研究自体が、人間と自然との有機的連関の理想的なかたちを探る方向性のものであることを、いまだメルヒェン研究のみに終始する傾向にある日本のグリム研究への提言としたい。

〔今後〕

本研究の一部は、JSPS 科学研究費基盤研究(C)「超域する「異界」異文化研究・国語教育・エコロジー教育の架け橋として」(課題研究番号:21520383、研究代表者:大野寿子、平成 21-23 年度)において共同研究という形で継続研究される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 13 件)

大野寿子・千艘秋男・野呂香・早川芳枝・池原陽斉:なぜ“witch”や“Hexe”を「魔女」と訳すことができるのか—日本における「魔女」あるいは「魔」の系譜—、「東洋大学人間科学総合研究所紀要」第 10 号、75-92 頁、2009 年、査読有。【東洋大学人間科学総合研究所平成 20 年度共同研究チーム「魔女」の系譜—日本における漢文化と西洋文化の融合のメカニズム—(研究代表者:大野寿子)の研究成果と一部重なる】

大野寿子・早川芳枝:„Hexe“が「魔女」

と出会うとき—近代日本における翻訳をめぐる—考察—、日本独文学会編「Neue Beiträge zur Germanistik (ドイツ文学)」第 138 号、233-249 頁、2009 年、査読有。【東洋大学人間科学総合研究所平成 20 年度共同研究チーム「魔女」の系譜—日本における漢文化と西洋文化の融合のメカニズム—(研究代表者：大野寿子)の研究成果と一部重なる】

大野寿子：グリム兄弟と森のエコロジー—『古いドイツの森』序文をてがかりに—、岩波出版『思想』7月号(2009) 全 24 頁、2009 年、掲載決定。

大野寿子：グリム・メルヒェンにおける森の諸相()—「人工の事物」をめぐる—、東洋大学文学部紀要「文学論藻」第 82 号、116-135 頁、2008 年、査読無。

Hisako ONO: Verschiedene Aspekte des Waldes in den Deutschen Sagen der Brüder Grimm. Im Vergleich mit den Kinder- und Hausmärchen. 日本独文学会東海支部編「ドイツ文学研究」第 40 号、49-66 頁、2008 年、査読有。

大野寿子・早川芳枝：近代日本における翻訳語「魔女」の成立—グリム・メルヒェンと森鷗外をてがかりに—、ヘルダー学会編「ヘルダー研究」第 14 号、121-148 頁、2008 年、査読有。【東洋大学人間科学総合研究所平成 20 年度共同研究チーム「魔女」の系譜—日本における漢文化と西洋文化の融合のメカニズム—(研究代表者：大野寿子)の研究成果と一部重なる】

大野寿子：愛知教育大学における「ドイツ語」および「魔女」像の比較文化研究」授業実践報告—アンケート結果をてがかりに—、愛知教育大学共通科目委員会編「教養と教育—愛知教育大学共通科目研究交流誌—」第 7 号、103-114 頁、2007 年、査読無。

Hisako ONO: Waldsybolic bei den Brüdern

Grimm. In: Fabula. Zeitschrift für Erzählung. Bd.48. Berlin (Walter de Gruyter). 73-84 頁、2007 年、査読有。

大野寿子：「いばら姫」における魔法の眠りと時間の喪失—グリム兄弟の文献学的観点から—、梅内幸信編「グリム・メルヒェン研究—その多様なアプローチ」日本独文学会研究叢書 050 号、4-15 頁、2007 年、査読無。

Hisako ONO: Das Südliche und das Nördliche in „Italienische und Scandinavische eindrücke“ Jacob Grimms. In: Akten des XI. Internationalen Germanistenkongresses Paris 2005 „Germanistik im Konflikt der Kulturen“. Bd.9. Bern (Peter Lang AG). 67-73 頁、2007 年、査読無。

大野寿子：グリム兄弟におけるメルヒェンと伝説—水の循環の比喩をてがかりに—、日本独文学会西日本支部編「西日本ドイツ文学」第 19 号、17-31 頁、2007 年、査読有。

Hisako ONO: Kultursemantik und Naturmetaphorik. Die Brüder Grimm über das Nibelungische. In: Goethe- Gesellschaft in Japan (Hg.): Goethe- Jahrbuch. 48 Jg. München (Iudicium Verlag). 139-156 頁、2006 年、査読有。

大野寿子：グリム・メルヒェンにおける森の諸相()—「自然の事物」をめぐる—、九州大学独文学会編「九州ドイツ文学」第 20 号、59-91 頁、2006 年、査読有。

〔学会発表〕(計 7 件)

Hisako ONO: Buddhistische Dämonen und westliche Hexen in der japanischen Vorstellung von „Majo“ (魔女). Humboldt-Kolleg 2008 Rikkyo, 2008 年 3 月 17 日、於立教大学(招待講演)

大野寿子・早川芳枝：「魔女」あるいは「魔」の系譜—日本における仏教的なもの西洋文化との出会い—、ヘルダー学会 2008 年度

春季研究発表会、2008年5月24日、於立教大学。

Hisako ONO: Das „Majo(魔女)“- bzw. Hexenbild im gegenwärtigen Japan. Ein Praxisbericht über die Vorlesungen an zwei Universitäten. アジア地区国際ゲルマニスト会議—Asiatische Germanistentagung AGT 2008—金沢大会、2008年8月27日、於金沢星陵大学。

大野寿子: グリム兄弟における「小人」像、日本独文学会 2007 年秋季研究発表会、2007 年 10 月 7 日、於大阪市立大学。

大野寿子: グリム兄弟『ドイツ伝説集』における森の諸相、日本独文学会東海支部 2007 年度冬季研究発表会、2007 年 12 月 1 日、於愛知大学。

Hisako ONO: Das Bild der Naturpoesie bei Jacob und Wilhelm Grimm: Ein Vergleich zwischen den Brüdern angesichts der Begriffe „einheimisch“ und „nibelungisch“. Humboldt-Kolleg 2006 Rikkyo、2006 年 9 月 10 日、於立教大学 (招待講演)。

大野寿子: 「魔法の眠り」と「時間の喪失」—グリム・メルヒェン「いばら姫」についての一考察—、日本独文学会 2006 年秋季研究発表会、シンポジウム「グリム・メルヒェン研究—その多様なアプローチ」の第 1 部「モチーフ研究の立場から」、2006 年 10 月 14 日、於九州産業大学。

〔図書〕(計 1 件)

大野寿子: 『黒い森のグリム—ドイツ的なフォークロア』、郁文堂、全 352 頁、2008 年。

【東洋大学平成 19 年度特別研究「グリム兄弟における理念としての「森」—太古と現代を結ぶ架け橋として—」の研究成果と一部重なるものである】

〔その他〕(計 11 件)

記事：大野寿子: 「お菓子の家」と「パンケーキの実る木」—グリム童話を考える—、東洋大学通信教育部「東洋通信」第 46 巻 1 号 (4 月号) 4-8 頁、2009 年 4 月。

記事：大野寿子: グリム兄弟と森〔連載：グリム兄弟とそのメルヒェン集【第 10 回】〕、児童図書館研究会会報「こどもの図書館」第 56 巻 1 号、14-15 頁、2009 年 1 月。

記事：大野寿子: 水とカエルの物語—グリム童話を考える—、東洋大学通信教育部「東洋」第 45 巻 9 号 (12 月号) 4-7 頁、2008 年 12 月。

記事：大野寿子: グリム童話と森〔連載：グリム兄弟とそのメルヒェン集【第 9 回】〕、児童図書館研究会会報「こどもの図書館」第 55 巻 12 号、14-15 頁、2008 年 12 月。

記事：大野寿子: 水の精のように生命をはこぶグリム童話のカエル、井の頭自然文化園主催国際カエル年イベント用パネル、於井の頭自然文化園、2008 年 4-12 月。

講演：大野寿子: グリムの森・ドイツの森、このはなさくやひめ主催、2008 年 11 月 7 日、於富士市複合施設フィランセ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大野 寿子 (ONO HISAKO)
東洋大学・文学部・准教授
研究者番号：20397491

(2) 研究分担者なし

(3) 連携研究者なし

〔研究協力者として〕

野呂 香 (NORO KAORI)
東洋大学・人間科学総合研究所・客員
研究員、研究者番号：20528781

早川 芳枝 (HAYAKAWA YOSHIE)
東洋大学大学院文学研究科国文学専
攻博士後期課程 3 年

池原 陽斉 (IKEHARA AKIYOSHI)
東洋大学大学院文学研究科国文学専
攻博士後期課程 3 年